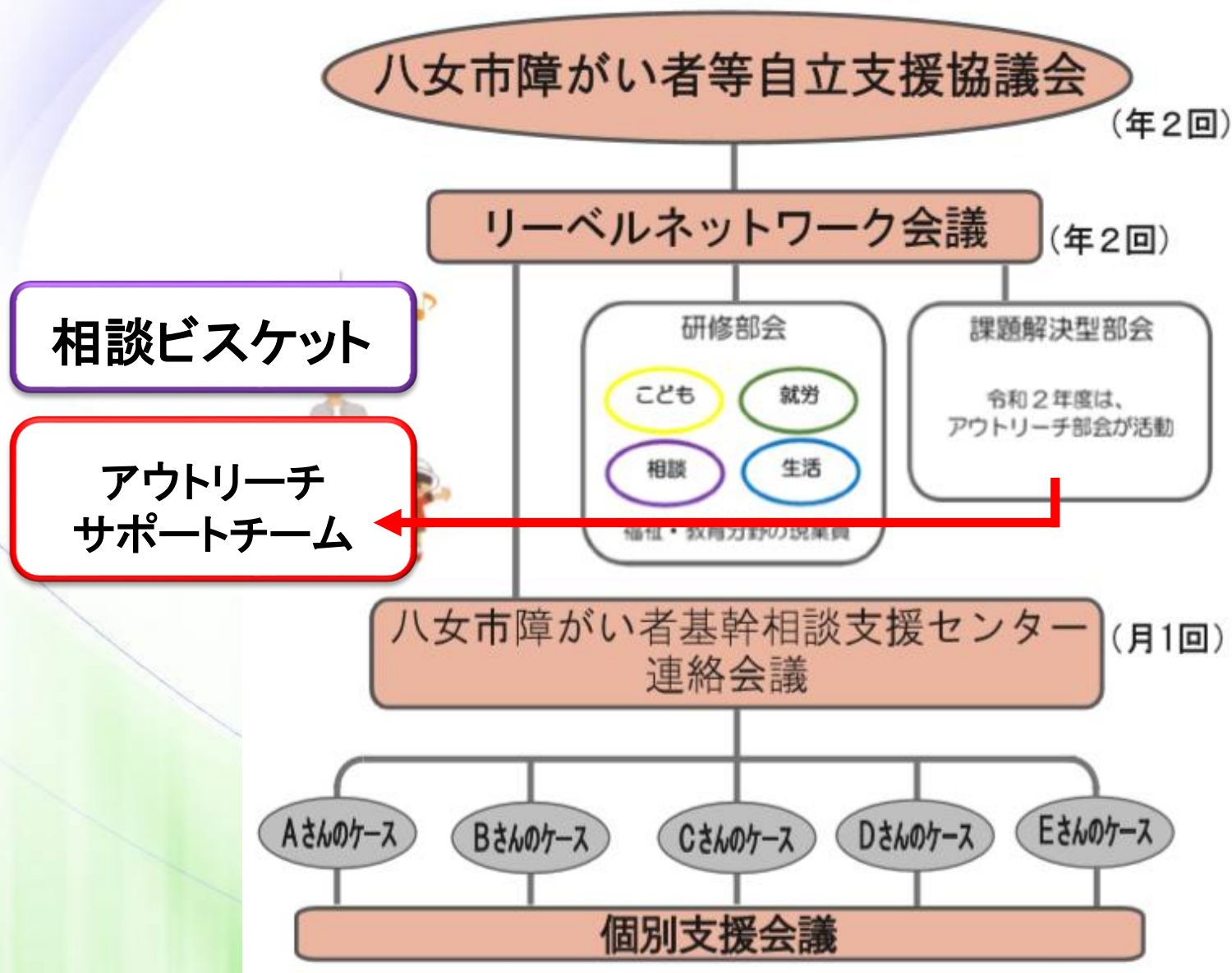


# アウトリーチ部会の終結と今後について

# 協議会体制



# アウトリーチ部会設置の経緯①

## <課題意識>

- ①年齢層が様々。若者から障害者、高齢者、生活困窮等、支援領域が多岐に渡る。連携が必要。
- ②障害のない方については、現時点で明確でないがある方もおられるため基幹センターで対応すべき。  
障害がない方をつなぐ資源が限られている。  
就労がテーマになりやすいが踏み出せない方が多い。  
⇒相談につながっても出口で困る。
- ③「会いたくない」に対して工夫が必要。  
介入の糸口を探るアセスメントを一人の相談員、一機関で行っていく負担があり、介入方法についても「これでよいのか」という不安もある。
- ④かかわりが長期になる中、新規相談が寄せられている。



# アウトリーチ部会設置の経緯②

- ①視察（基幹、地域生活支援拠点、社協、市）
- ②視察振り返りから準備委員会での協議
- ③課題意識とデータの整理



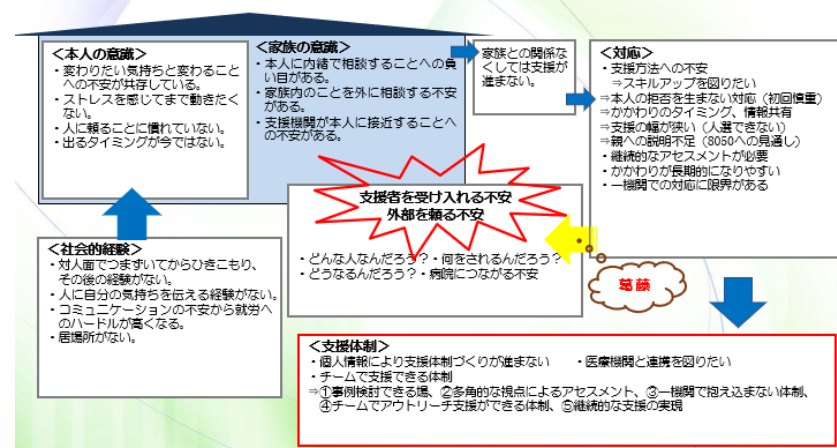
**家族力の弱さ**

- ・経験不足
- ・他者と感で受け
- ・自分の力だけで
- ・言葉、知識
- ・経験が浅い
- ・制度の仕組み
- ・障害がない
- ・支援が受けられない

**本人の意識**

- ・経験不足
- ・他者と感で受け
- ・自分の力だけで
- ・言葉、知識
- ・経験が浅い
- ・制度の仕組み
- ・障害がない
- ・支援が受けられない

## ● 課題意識の図解



## ④ネットワーク会議での報告と承認



### 3. 障害の有無

	リーベル	すいれん	ほっと館	合計
なし	18	16	9	38
有	22	8	4	34

	計	合計
(男性)	0	2
(初期)	10	2
(精神)	8	4
(発達)	9	0
(認知)	1	0

### 1. 男女比

	リーベル	すいれん	ほっと館	合計
男性	23	16	10	49
女性	12	8	3	23
計	35	24	13	72

### 2. 年齢

	リーベル	すいれん	ほっと館	合計
10代	6	0	1	7
20代	9	4	1	14
30代	8	7	8	23
40代	6	1	1	8
50代	5	7	2	14
60代	1	5	0	6

・半数以上が障害の認定を受けている精神疾患や障害が疑われる方も多くても特に障害がある方、その疑いの思われる。一部ではあるが、病気でそのような方の支援をどの機関が担

・支援総数は3機関で72名、9名の重複あり実人数は63名である。  
 ・支援者数72名のうち、男性が45名であり71.4%を占める。  
 ・すいれんでは50～60歳代の相談が多い。相談総数の33%が高齢部門と密接に連携している社協であることが背景にあると思われる。ほっと館やめについては30歳代が61%と一番多い。ひきこもりの親の会笑福の会よりつながっているケースが多いため、会の傾向に沿っている。リーベルについては30歳代までの方が多い傾向であるが、大きな開きはない。

# アウトリーチ部会設置の経緯③

## ＜アウトリーチ部会の設置に向けて＞

- ①一人の相談員、一つの機関で抱え込まない体制
- ②多角的視点からアセスメントを行うことができる体制
- ③継続的に関わることができる体制
- ④質の高いアウトリーチが可能となる取り組み

# アウトリーチ部会の構成

## <目的>

「ひきこもり」「孤立」に関する相談支援の強化に向けた協議

## <委員構成>

- 子育て支援課
- 地域包括支援センター
- 保健福祉環境事務所
- 社会福祉協議会
- 地域生活支援拠点センター
- 精神科医療機関（訪問診療担当看護師）
- 精神保健福祉センター（ひきこもり地域支援センター）
- ひきこもり地域支援センター筑後サテライトオフィス  
（事務局）福祉課、基幹相談支援センター

## <期間と頻度>

令和2年2月～令和4年3月 2か月に1回程度  
⇒コロナ禍により令和5年3月まで

## <活動>

- 教育プログラムを活用した研修等により知識・技術の向上を目指す。
- 事例検討等を通して連携体制の検討を行う。部会解散後の支援体制について検討を行う。



# 実践研究



ホワイトボード

事例概要

困っていること

10分

事例への質問

困っていること  
への質問

アイデア出し

地域課題

10分

10分

15分

5分

相談員の困っていることに焦点を当てて、相談員の内面的な気づき、具体的な手段につながるアイデア出しを行った。自身の分野が関与しない事例についても「相談員を支える」という視点でアイデアを出すことで、領域を超えた支え合い、連携し合う風土づくりにつながった。

事例提供者が出してよかったと思えることを重視して実施した。

## <アイデア>※抜粋

- 携帯、ラインの方が意見が言いやすいのでは。
- 本人たちの興味は何か。
- やりがいを見つけていく。
- 一人の対応として悩まずに、チームで。
- 精神科病院、特にDrの協力を得る。
- 反応がなければ自分の話しを。答える辛さがなく、聞くだけでよい人と思ってもらえる。
- 障害特性への配慮。日時・誰が行くかを予告する。
- いろいろな人を試してみる。
- 家族のサポートは続ける。
- 父親からの発信はあるので細々と繋がる。
- 訪問看護を父親に入れる。
- 関係の良い妹から手紙を出す。
- 昔の知り合い等斜めからのアプローチ。
- 治療からではなく、過去の元気な時の様子を聞く。
- 本人が叶えたいことに関わる。

○会えないとはいえ、本人の反応あり。誠実さが伝わっているのでは。

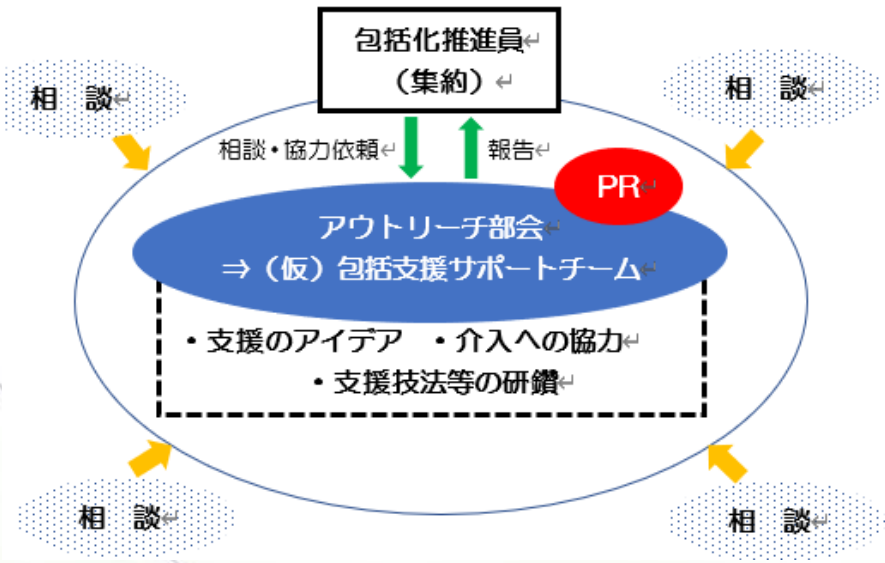
○家族が事例提供者に相談する方向付けを持っている。努力の成果。

事例概要		母方の叔母はいる。交流があるが、関係性は不明	
父親 40歳 仕事：会社員	単位制の希望があったが、不安、怖さ。	母親 43歳 無職	学校の先生と会えない。年に2〜3回。
長女 16歳 中卒後1年	母親は困っており、教育相談。	次女 15歳 中卒したばかり	を紹介されたが、本人たちが嫌がる。
二人とも中学より不登校（友人関係）	涙を流しながら訴えはあるが、本人たちに伝えられない。	借家 4人暮らし	本人たちの方が強い。
生活保護	父親の兄弟が不登校。刺激を考えると上手くいかないという経験。物に同じような経験をしたくない。	母親と外出可能。	今は見守り、本人たちが出たいと言った時期を待つ。
	横わないでくれ。仕事で週末帰ってくる。	絵を描くことが好き。	父親との関係はよい。
<事例への質問>	<困っていることへの質問>	<アイデア>	
・引きこもりのタイミング	・母親には会えるが、本人たちは出てこない。会えない。	・父親の兄弟がどう社会復帰したか聞く。	
⇒姉、妹中1より不登校。	・母親とは定期的にやり取りできる。	その方法であれば父親も協力的になるのでは。	
・長女、次女二人の仲の良さ⇒仲が良い。	・母親⇒月1〜2回のやり取り、訪問すれば会える。	・携帯、ラインの方が意見が言いやすいのでは。	
・仲がいいから出てくれないと感じている。		・本人たちの興味は何か。やりがいを見つけていく。	
・兄弟で一日を無事に過ごすことができる。			
・孤独感が和らぐ。			
・小学校は通えていた。	・母親、受け答えはきちんとしている。買い物には出ている。能力に課題は今のところ感じない。次女が壁に横である。		
・お兄さん影響大。学校に行かなくてはならない。家の中の意見で動いていた。	・クレマーの存在があった。		
・その病状により強さがトーンダウンしている。			
・次女は顔にできものができて、			
・不衛生による理由。足の痛み場がない。			
・荷物が多い。身なり、周りが近寄りやすくなった。			





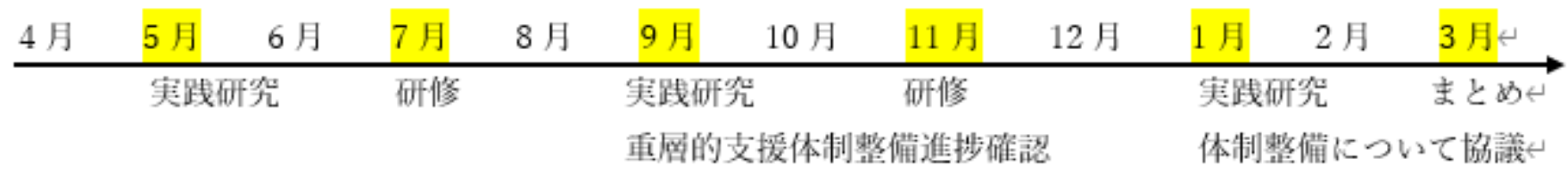
# 令和4年度の活動



※令和4年1月時点

令和3年度のまとめとして、成熟してきた連携をひきこもり支援のサポートチームとして残していく方向づけとなった。

社会福祉協議会の重層的支援体制整備の仕組みの中に位置づけて活動できるよう、令和4年度は実践研究とスキルアップ研修を実施しながら、新たな体制へと移行していく。令和4年度をもってアウトリーチ部会は活動終了することを目標にしていた。経過として、アウトリーチ部会で行っている相談員のサポートについては重層支援体制整備上はコーディネーターが担うことになっており、サポートチームとして位置づけることが難しいことから、発展先を再検討する状況となった。



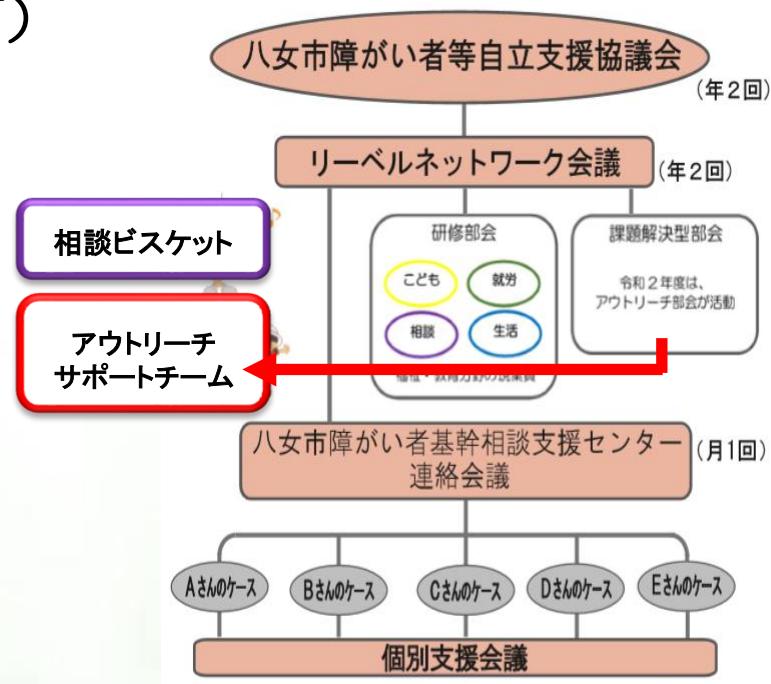
# 結果①

令和5年3月7日（火）開催の令和4年度第5回アウトリーチ部会において、相談ビスケットと同じ位置づけでチーム運営していくこととなる。

名称：アウトリーチ・サポートチーム  
(Outreach Support Team:OST)

＜アウトリーチサポートチームの目的＞

相談員の困りごとに焦点をあてたグループスーパービジョン、事例検討をチームで実施する。介入の引き出しを増やし、内面的な気づきを増やしていくことにより「相談員を元気にしていく」ことを目的とする。またチーム員のスキルアップのための研修企画や各領域の状況についての意見交換を行い、分野を超えた連携強化を図っていく。

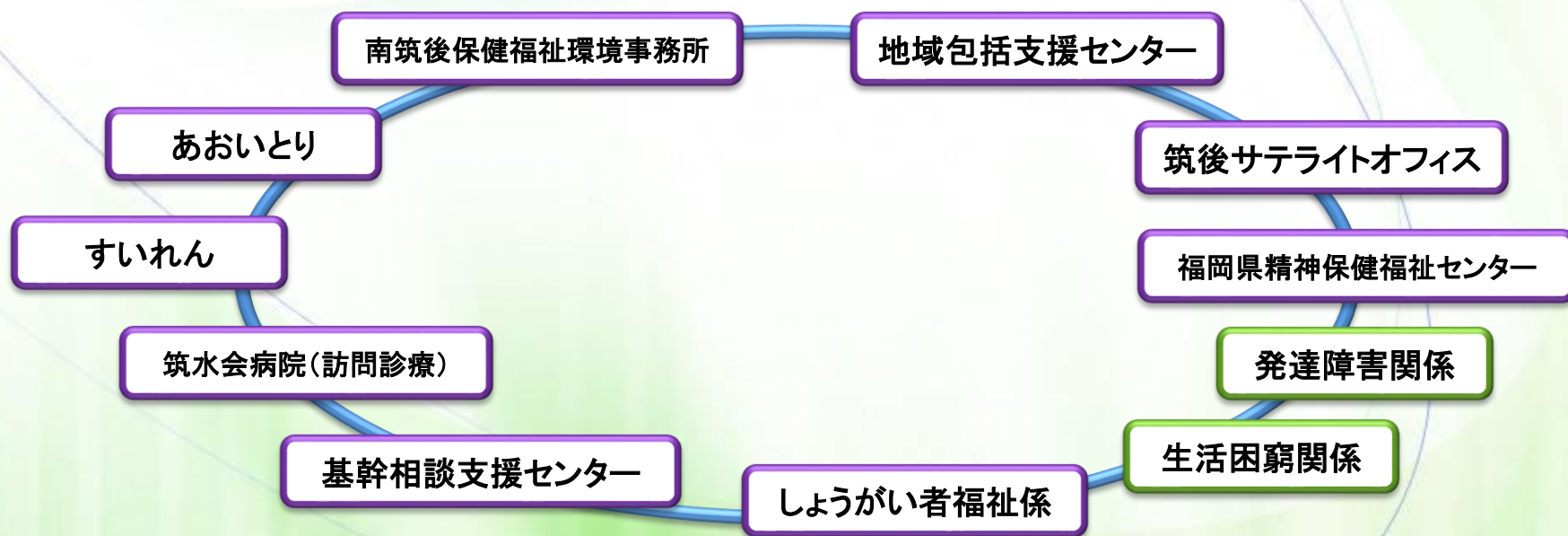


※発達障害、生活困窮関連の相談員を増員  
※オブザーバー参加可能とする

# 結果②

＜内容＞

3か月に1回、定期開催し、令和5年度は5月、8月、11月、2月に開催する。11月は研修会を企画する。チーム員より事例を出しグループスーパービジョンを実施し、チーム員の内面的な気づきを含めたスキルアップを図る。各領域の相談の傾向等の意見交換を通じた連携強化という点からもチーム員のための活動を主軸に展開する。



# 今後について

本会（リーベルネットワーク会議）にて報告した後、チームのPRを事務局にて作成、チーム員がそれぞれの領域で周知する。相談員より事例が提出された場合は、事務局にて受付を行い、日程を決めてチーム員を招集、集まれる人員でスーパービジョンを実施する。形態は集合を基本とし、ハイブリッド対応できるようにする。

支援に行き詰まりを感じている相談員に対して、支持的にアイデアを出していくことで、気づきの促し、実践の承認、かかわりの動機づけを高める等のサポートを行う。